子ども学探訪

倉橋惣三との対話⑤
「森の幼稚園」という理想（その3）

浜口順子
（大学教員）

アメリカの地における「森」への思い

シカゴから汽車に揺られドーナー・グローブに降り立ち、そこで倉橋先生は、それまでアメリカで見たどの園よりも居心地よく「一番好きな幼稚園を見出し」たのでした。先生がそれほど気に入った理由を、私は、その九年前に先生が「森の幼稚園」として奇しくも描いていた理想の幼稚園を目の当たりにしたからだと初めは思いました。でも、おそらくそれだけではなかったのですね。次の部分を読み、そこには、レイチェル・カーソンにも影響を与え、現代のエコロジー運動の祖として有名なヘンリー・ソロー（Henry D. Thoreau　1817～1862　倉橋先生はトローと書いています）が関係していたことを知りました。

私は初等科の細工場の傍にある、先生の書棚の中に、教育書や博物学の書物の間にまじえて、トローの四季日記集のあるのを見つけました。そして、ちょうどそこへ来合わせたミス・マルセに向って、ありますね、と指さして見せました。ミス・マルセは何ですかというように硝子戸に顔を寄せて見て、例

浜口順子（はまぐち じゅんこ）
お茶の水女子大学教授。本誌編集主幹。

の言葉少なに、いい本ですねといいました。これは私の最も好きな本の一つです。私は早くコンコードに行って、トローの愛した自然が見たいと思っています。しかし、今日は、長く自然に餓えていた私の心が汽車の沿道からして、すっかりと充たされました。ここに来てからは、この森の景色が、どの位私を喜ばせたか分りません。（中略）――こう流暢にいったかどうか分りませんが、何しろ今朝から久し振りの自然に張りつめている私の心は、トロー集を見るに至って抑えきれなくなったものと見えます。

（『倉橋物三選集　第二巻』フレーベル館　一九六五年　pp.413-414）

ソローの『ウォールデン―森の生活』は明治末には和訳されていました。倉橋先生は英語の原文で読んでいたかもしれませんが、先生の学生時代にはすでに話題になっていたはずです。産業化の波を受けて都市と田園とが遊離し、利益・効率の追求へと人間の欲望が偏向するという近代的問題を、科学的に、しかも生活者の視点から問うというパラダイムに倉橋先生も出会い、アメリカの地でその空気を吸っていらしたという事実。また、学生時代に先生が心酔し仲間と学びあった内村鑑三の思想にもソローの影響は大きいといわれますから、もしかしたら、一九一一年に倉橋先生が描いた「森の幼稚園」の中にもすでにソローの自然観が反映していたということでしょう。そういえば、倉橋先生はすでに同じ頃、都市化の中で子どもの健康や身体能力が衰えていることを危惧して訴えていましたね。

ソローが生まれたコンコードの地には、その後、行かれましたか？　二年余の長い留学期間の終盤ですから、アメリカの文明や新進性の中で、先生の心もいつの間にか、自然の潤いやミス・マルセの染み入るようなもてなしに飢えていたのでしょう。

明治末に倉橋が描いた「森の幼稚園」の先進性

最後にまた、倉橋先生自身が二十代末に描いた理想の幼稚園のほうに話を戻させてください。現代の幼児教育現場にも新鮮な問題提起をしてくれていると思います。

(1) ユニークな専門家の配置

まず、「園芸主任」という人が職員として雇用されていますね。花田さんというお名前の。「森の幼稚園」には、四季の草花が咲き、果樹園や畑がある。また家畜小屋、鳥小屋もあって、多様な生きとし生けるものの世話をする方が、いわゆる「ガーデン主義」(フレーベルの思想の実現ですね)の担い手になっています。園長先生は花田さんにこう言います。

「ねえ君、温室のように無理強いに咲かすのでもないし、といって勿論、野原のように野生のまま放任して置くのでもなし、自然に生長して、自然に咲くべきものに、適当な培養を与えるのが君の仕事でしょう。――つまり幼稚園なんだねえ」(同p.87)

もう一人、深井さんという「研究主任」がいます。毎週水曜の午後二時間、深井さんが入念に準備した研究会がもたれ、保育者たちの真剣な学びが展開されます(別に、詩を味わったり創作したりする「詩の会」というものもあり、それのある週はないのですね)。例えば、フレーベルの『マザープレー』(母の遊戯及育児歌)を、英訳本と日本訳とを比較検討し、他の文献にもあたって周到に準備されます。深井さんは「米国のクラーク大学に三年ばかりいて、その後ベルリンの

ペスタロッチ・フレーベル・ハウスで暫く研究して来た人」とのことですから、いわゆる充て職的な研究主任ではありません。本物の研究を通して保育者を育てることを倉橋先生は大事に考えておられたということでしょう。

(2) 保護者支援の場

「森の幼稚園」には、大きな応接室が二つあり、一つは研究的来訪者のため、もう一つは幼児の親たちのためのものです。親のための部屋は、四季相応の設備はもちろん、家具調度品や装飾も派手過ぎず、打ち解けた雰囲気にするよう配慮されており、冬は珈琲、夏は麦湯で応対をすることまで書かれています。夜更かし癖について相談に訪れた正男君の親は、その後「この頃では奥様、八時になりますと自分からやすむのでございますよ」とおしゃべりをしに来たりしています。

こういった調子で、少しもあらたまらない、極く親しい、心おきない談話の間に幼稚園から注意も与えれば、家庭からの注文もきく、殊に保育上の参考になるべき互いの打合せを十分にする。先生が始終いっておられます。「この応接室がなくては我らの保育は半分以上出来ない」と。（同p.99）

不幸な境遇で苦労した春野さんという、夫を亡くし幼子を抱えた女性が職員となり、職場環境の中で晴れやかな「笑がおの人」になっていくというお話もありました。現代的な言い方をすると、多様な人が出会うコミュニティ的な教育環境を、すでにイメージされていたのではないでしょうか。幼稚園臭くなく、その中で大人も子どもも、それぞれの自分らしさを発揮して、自然に生活する場として。